

たりすることもできない。ラジオを使うのが精一杯だ。息子たちの世代が十分に暮らすだけの財産を残すこともできない。ボコ・ハラムは、社会に不満をもつ若者に拡大する危険性が十分にあるのだ。」

気候変動による降雨の不順と作物収量の低下、経済状況の悪化は飢餓や貧困の蔓延を引き起こす結果、ボコ・ハラムが拡大し、各地で破壊活動をつづけ、社会を混乱に導く危険性を高めている。経済格差の問題はニジェールに限った問題ではないだろう。世界は、富の公平な分配をどうすすめていくのか。われわれの眼前には、厳しい現実が横たわっている。

引用文献

大山修一. 2015. 『西アフリカ・サヘルの砂漠化に挑む—ごみ活用による緑化と飢餓克服、紛争予防』昭和堂.

Groupe Jeune Afrique. 2015. *Jeune Afrique: International Indépendant*. No. 2863. 22 au 28 Novembre 2015. Paris.

Trofimov, Y. 2015 (December 4-6). Boko Haram threat expand beyond Nigeria, *The Wall Street Journal*.

UNDP (United Nation Development Programme). 2014. *Human Development Report 2014 Sustaining Human Progress: Reducing Vulnerabilities and Building Resilience*. <<http://hdr.undp.org/en/content/human-development-report-2014>> (2015 年 12 月 4 日)

WFP (World Food Programme). 2015. *Food Security and Humanitarian Implications in West Africa and the Sahel*. No. 66 July 2015. <[http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Joint%20Note%20July_2015_English_FAO_WFP_14%208%202015\[4\].pdf](http://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/Joint%20Note%20July_2015_English_FAO_WFP_14%208%202015[4].pdf)> (2015 年 12 月 4 日)

World Bank. 2012. *World Development Indicators 2012*. <<http://data.worldbank.org/sites/default/files/wdi-2012-ebook.pdf>> (2015 年 12 月 4 日)

支援者との思い出

—東ネパール山間部のダカ織工房でのインタビューより—

高 道 由 子 *

私はこの夏、ネパールでダカ織という織物についての調査をした。国内情勢の影響で、生産地として有名で最も訪れたかったテラトゥム郡には、調査の終盤に 1 週間滞在することができたのみだった。それでもその短い

日々は、今回の調査期間の中で最も色鮮やかな記憶として残っている。テラトゥム郡はネパールの東側の山間に位置する。私が滞在したテラトゥムの M という町では、リンブー民族の女性に織りの文化が受け継がれている。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ダカ織とは

ダカ織とはネパールの代表的な織物で、男性用の帽子（トビ）に使われる織物として特によく知られている。ネパール人にダカ織について訊ねると、「西のパルパが有名」「東ネパールのテラトゥムやダンクタ、ダランで作られている」と、ばらばらの回答が返ってくる。現在はそれ以外にもカトマンズやその他の地域でも多く製作されている。首都近郊のダカ織は、詳細な調査は実施していないが、フェアトレード関係で製作されていることが多いようだ。私が滞在したテラトゥム郡のM町でも、過去にイギリスの団体が活動しており、ダカ織の織り手の女性に対しての支援もしていた。

支援についてのインタビューの反応

今回の調査で、ダカ織の工房を何軒かまわり、支援が入った当時のことを知る工房のオーナーたちにインタビューをした。工房の



写真1 ダカトビを被る男の子
(テラトゥムにて撮影)

オーナーたちに話を聞いていて印象的だったことは、彼らが支援についてではなく、支援者との日常的なやりとりや思い出話を中心に話をしたことである。たとえば、工房の元オーナーである女性Rは、当時の支援の様子について聞きたいと私が言うやいなや、数年前にイギリスで当時の支援者の女性と再会した話をしてくれた。Rの息子はイギリス軍に入隊しており、息子に会いに行った際につてを辿り、当時の支援者の家を訪問したようだ。

「数年前に会いにいったよ。彼女は私の訪問を本当に喜んでくれた。手作りのクッキーとお茶を自ら入れてくれてね。もう95歳になるっていうのに。」

また、別の工房のオーナーは次のように話した。

「数年前に突然ここに現れたよ。大きな籠をしょってね。もう年だからゆっくりゆっくり歩いていた。そして、久しぶりの再会をして、お互いとても嬉しかった。」

私が、再会したときではなくて、当時の支援がどのようなであったかについて聞きたいと念を押すように言うと、

「彼女（支援者の女性）は、はじめはネパール語も話せなくて、織もできなかったから教えてあげたよ。ここの椅子に座って一緒にご飯を食べた」と続けた。それから、支援の内容について何度か質問してやっと、サリーの制作用の織機をカトマンズからもってきてくれた話や、カトマンズの五つ星ホテルでダカ織の展示会を開いて、そこに連れて行ってくれた話などが出た。

私は支援について訊ねた際に、どういう支

援を団体が実施したのか、当時の支援項目を挙げてもらえるのを期待していた。しかしこの期待はよい意味で裏切られた。彼女たちは支援者と被支援者としての記憶ではなく、人間同士の情動的なつながりの思い出を語り始めたからである。もちろん私の訊ね方によって、回答がそのような側面も大いにあると思う。しかし、当時の支援者との交流を語る彼女たちの様子は、心から懐かしげで嬉しそうで、支援の内容を聞いただけでは把握できない、豊かな日常のやりとりがそこに存在していたことが明らかにみてとれた。

支援とはなにか

M町において、実際の支援はもちろんなされていて、支援される側の織り手の女性たちは支援についてとても感謝していた。一方で、なされた支援以上に、支援者個人との思い出や彼女への想いについて話す人々の姿が印象的だった。それは、この支援が人付き合いを土台になされたからではないかと考える。支援というと、一方が他方に与えられるようなイメージがなくはない。しかしこの事例では、たとえ支援というものがなくなったとしても、人付き合いとして成立するような関係が築かれ、かつそれが長年にわたって継続したことが大きいように思える。

その証拠に、支援などを目的に単発でこの地を訪れ、去っていった人については、たとえばその人がどんなに大きな支援をしたとしても支援の内容にはほとんど触れず、「私たちのことを忘れた」とだけ悲しそうに言う。支



写真2 織り手の女性
(テラトゥムで撮影)



写真3 店の様子
(テラトゥムで撮影)

援者、研究者、誰かの友人であるにかかわらず、何度も顔を出す人のことは、小さなやりとりまでとても楽しそうに話した。

このインタビューをした女性たちの情緒的態度は、当たり前といえば当たり前すぎることもかも知れないが、物事の目的や成果を中心に考えてしまいがちな私にとって、当時の思い出を楽しそうに話す彼女たちの姿は心に強く残った。